
貴方のために…

swan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方のために…

【Nコード】

N3172R

【作者名】

swan

【あらすじ】

イヴ・オルダム（Ib・Oldahm）は5年近い結婚生活に終止符を打とうと半年前に飛び出した我が家で、夫であるジーン・オルダム（Gean・Oldahm）に立ち向かう意志を固めた。私ではもうきつと、彼の夢を叶えることは出来ないのだから。彼と離婚出来るなら私はどんな悪女にでもなってみせるわ……。この別れは、彼女の彼への愛の証だった――。

イヴ・オールダム（Ib・Oldham）は、実に半年ぶりの我が家のリビングで、夫であるジーン・オールダム（Gean・Oldham）の帰宅を待っていた。

つい先程、アンティークの壁紙に掛けられた、それまた壁紙とマッチする高級な時計を確認したばかりなので一体自分が久しぶりの我が家で、どのくらいの時間を過ごしているのか、すぐまた確かめる気はなかった。母を手伝うフラワーショップを出たのは夕方だったが、とうに十時を回っている。…といっても約束はしていないのだから、一向に帰らない夫に文句を言う理由はない。

今夜はもう戻らないのかもしれない……。

根っからのビジネスマンの夫に立ち向かわなくて済むのだと思うと、心の奥で震え、怯えている決心も少しばかり和らいだ。

そう。彼女は今日、ある重大な決心を胸にここへやって来たのだった。

彼はあらゆるものに惜しめない愛情を注ぐが……、裏切りは許さない。そう、私のような人間を……。

神様の前で永遠の誓いをしておきながら逃げ出すような女を、例え妻でも許さないだろう。

彼の信頼を傷付けた者に弁解のチャンスなど与えられない。寛大な愛を持った聖人は、無情な悪魔にだってなり得るのだ。それが、ジーン・オールダム。夫を、彼女は充分理解しているつもりだった。それなのに…私は一体何をしたの……？彼の留守に置き手紙も無

しに飛び出して……。

そして今日、連絡もなしにこのこやって来るなんて――。よくもそんな命知らずなことが出来たものだわ……。

どんよりとした心模様から気を散らしたくて、彼女は、控えめだが洗練された上品さのある家の内装に目を配った。：雷に撃たれるのは、夫が帰って来れば充分に味わうことが出来るのだから――。

この豪華な一戸建ては、結婚する前からの彼の財産だった。家具もほとんど彼の持ち物だ。半年前まで一緒に暮らしていたのに、今では他人の屋敷に足を踏み入れた気分には彼女をさせた。

この家は……こんなにも冷たい空気が漂う暗いお家だったのかしら……？ ああ……でも――。

そこで彼女は今自分の座っている、小花柄の薄グリーンのソファに愛着をもち、指で撫でた。新婚当時に気に入って選んだ家具だった。

夫の職業柄、あらゆる知人が我が家を訪れるだろう。だが彼女はあえて、この小さな二人掛けのソファを一つ選んだ。

どんなに彼が忙しく帰っても、ほんのひととき、このソファで寄り添えたら……、と。

彼女の選ぶ家具が二人の愛の巢が増えていくのを、彼はとても気に入っていた。とりわけこのソファは特に。寝室に置いてあるはずの同じタイプの色違いは、彼が購入してきたものなのだから。

……寝室の、ベッドへの距離がもどかしく、このソファで愛を交わしたのは一度や二度では数え足りない。自分のお気に入り場所を抱かれる妻の、真っ赤に恥じいる姿を夫は好んでいた。

彼の見事な筋肉に私はひれ伏し、酔狂の溜め息をはく。彼の190センチ近い長身、逞しい体は、小さな私をやすやすと何度も組み敷いた……。

18歳のアルバイト先で出逢ったとき、彼はもう立派に成功している青年実業家で、私より12歳も大人だった。

私は、学校と週二日のアルバイトを往復するだけの女の子で、低

い身長にコンプレックスを抱き、些細な出来事に悩んだりする、ごく普通の女の子だった。なにより特別綺麗でもなく……。

初めて彼に話しかけられ、内容がデートの誘いだと理解したときは恐ろしかった。彼は、王子様と垢抜けない少女を主人公に、どんなゲームのシナリオを書き上げたのか、と。

どんなに惹かれていてもゲームの相手にはなれない。バッドエンドは目に見えている。

取り立てて美しいもない可哀想な女の子は、王子様がオモチャに飽きたら捨てられる。それでも周りは口を揃えて、こう言うのだ。

“あなたは幸運だったわ”。そして――。

“でも、忘れては駄目よ。みにくいアヒルの子は所詮みにくいアヒルの子なんだから”……。

自分に劣等感を持つ彼女の辞書には、恋愛Ⅱバッドエンドの文字が綴られていた。

恋のあらゆる知恵も経験も、彼女のものではなかった。自ら傷付き、笑い者になる為に男性の手をとれる程、彼女は勇者でも冒険者でもなかったのだ。

“ノー”と口を開いたとき、興味津々に聞き耳を立てていたアルバイトの娘らが、彼女へ向けて悪態をついた。最もなことだ、と彼女も思った。

私なんか――そう、私なんかが最上級の男性の誘いを断る真似をするなんて……。

彼は、その答えを想像もしていなかったに違いないし、言った後でとにかく私は恐ろしかった。

彼のラフな格好の白いシャツとモノトーンのパンツは、私がデパートで見かけるような格安物ではきつとない。

もし彼が物凄く有能な人なら……自分にノーと言った最初の人物として彼のブラックリストに名を連ねられ、復讐されるのかもしれない……、と。

けれど、彼はあくまで紳士的に、忍耐強く私を口説いた。私が彼

に恋している真実は、もはや誤魔化しきれるものではなかった。
今も覚えている。

五度目のディナーデートの席で、彼はそっと問い掛けるのだった。
“——卒業後はどうするんだい？”

何もやりたいことのない自分が私は恥ずかしかった。何の取り柄もない私に、彼が飽きることが怖かった。一度でも驚きなのに、私を送り届けた後で、彼は必ず次のデートの約束を取りつけることを忘れない。

その度に私は内なる喜びに震え、いつ彼の私への関心が消え失せてしまうのか、眠れぬ夜を過ごす。この不確かな恋に終わりを告げるのは私ではない。

それなら今夜、彼はゲームオーバーを宣言する気なのだろうか……。

彼の触れたこともないセクシーな唇が開きかけたとき、彼女はありったけの勇気をかき集め、その衝撃に身構えた。

“……もし運良く君の予定表が白紙なら——結婚するっていうのはどうだい、僕と——……”

ジュースはどれにする？、くらいの軽快さで彼が話した衝撃に、彼女は自分の膝の形にしがみついた。踊り出してしまわないように。そして、はっとした。

私は……完璧な彼が選んでくれるような価値のある女性ではない——……。

“……私には胸を張れる資格も……学歴だってありません……。私を遠ざけるのに、そんな大切な言葉を引き出す必要はないんです。私解ってます、……あなたと私じゃ違いすぎるもの……”

“……忘れたの？君の料理の腕は最高だよ”

彼は、四度目のランチデートで作ったサンドイッチのことを話しているのだ。“それだけで貴方の妻になれるなら世界中の独身女性が皆キッチンに立つ……”、と彼女は答えた。

“……君はそう自分を卑下するが、あんなに幸せだった食事はない。”

君が居たからだよ”

彼女は首を振るばかりだった。

“――なるほど、解ったよ。君は僕が考え付いたことと思ってる。君を追い払う方法とやらをね――結婚をちらつかせれば、自虐的な君のことだ。怖じ氣付いて逃げてくれるだろう、と。君の考えるそれは地位や環境の違いから、か？”

彼は自嘲的に笑ってみせるのだった。

“：君の言う大切な言葉を、僕が本気でプロポーズしたとは思わないんだろうね”

“……家政婦が必要ならそうします……、”

“僕は求婚しているんだよ。君を妻にし、君と子どもを作りたい。”

：君こそ断わるつもりならはっきり言って欲しいね――”

そのときやっと、彼の苦々とした表情を見つめたとき、彼女は彼の本気と誠意に気が付き、胸を打たれた。

それから彼は、賑やかな家庭を築くという己の夢を話して聞かせてくれた。そんな彼を見て彼女も、彼の可愛い赤ん坊を産みたいと思ったのだ。

――：五年前に想いを馳せた彼女の心は重い鉛をかけられたかのように沈んだ。

私は信じて疑わなかった。

何年か後には、私はお腹の大きくなる自分を慈しみ、彼を可愛い坊やと小さな天使たちの父親にしてあげられる。

みんな、彼に似た艶やかな黒髪をもち、毛先が悪戯にクルンと踊っている。

彼の水色に近いブルーの瞳、血色のいいローズ色の唇……。彼の小人たち……。

ああ：なんて可愛らしいの……！！

小さな分身を想像するのは至福のひとつだった。

当然のように、時期が来れば私は彼の赤ちゃんのママになるもの

だと思っていたのだ。

「――：イヴ・オールダム：貴女は馬鹿よ……」

自分が欠陥品などと思いもしなかった……。

そのとき――彼女の待つリビングのドアが予測もなしに開かれた。

彼女のブラウンの瞳が緊張に、恐れに、そして悲しみを含んで見開かれた。

寄り添う男女……、今にも絡み合いそうな男と女……。

片方は自分の夫、ジーン・オールダムを見て――…。

〈?〉

2

イヴは、いくつかのシナリオを用意していた。

何の策も、鎧もなく立ち向かうには、企業のトップに堂々と君臨する夫はあまりに強敵だった。言い負かされる姿を想像するのは簡単で心細かった。

そして私は、昔見たスクリーンの中の女優の台詞を思い浮かべた。
“——お久しぶりね、あなた。早速だけれどこれにサインしてほしいの”——。

それは確か、年老いた夫に飽き、若い愛人に走る美しい妻が放った言葉だったけれど。イヴは、このフレーズに似合うピタリな女を演じてみせる、と己に誓った。

これなら手っ取り早くて済む。余計な時間を費やして、これまでの結婚生活を議論する必要もない。何よりも、彼女は恐れていた。過去も未来も、自分がたまらなく夫を愛していることを。

魅力的な夫を前にし、再会が長引けば長引くだけ、自分が愛するただ一人の男に決心を根こそぎ持っていかれるのが恐かった。

だが、ここへ向かう途中にも彼女が考えを巡らせたシナリオの第一声は、喉を通して出なかった。真っ赤なシルクのマニドレスを、その豊かなボディに最小限に身に着け、夫に寄り掛かる、若いブロード女を認識して——。

これは何かの冗談なのかしら？もしジョークのつもりなら、私は笑ってやらねばならない……。

けれども彼女は、ヒステリックに笑い出すことが出来なければ、

気を失い、倒れてしまえる魔法も知らなかった。冷たい波が心に押し寄せても、凍えられないのだと痛感した。

彼がふたりの……わたしたちの愛の巣に他の女ひとを連れて帰って来るなんて――。

イヴは、5年間の二人の愛の思い出が、真っ赤な毒リンゴの纏う香りに汚染されてしまう気がした。何かにしがみつきたい。でも、それがお気に入りソファであってはいらない。……イヴは平然を装いながら重ねた手に静かに爪を立てるのだった。

“ お久しぶりね、あなた ”――それだけでいい。まず、それだけと言えたら……。

彼女は気丈にも、何度か渴き切った口を開こうと試みた。魚が陸の上で空気を求めるように、不恰好に口を開いたり閉じたりした。だが、少しでも開こうものなら唇はたちまち震え、シナリオの台詞は役に立たず、僅かな防壁にもなってくれない。

色を無くした視覚の中で、やがてイヴは気が付いた。熟した甘い匂いをプンプンとさせるブロンド女を前にして、夫が妻を求めなくなった理由はこれなのだ、と。

目鼻立ちのはっきりする化粧、輝くプラチナブロンド、スラリと伸びた長身、健康的でふくよかな臍、刺激的でセクシーな真っ赤なドレス……。美しい女性的な魅力に溢れている。何もかも、私では叶わない。

彼は彼女にもキスをするのかしら……？

イヴは考えずにはいられなかった。

あの、しっとりと柔らかな唇で……あの、うっとりとする、夢の中への招待状のような、長く……優しい口付けを。

彼は、私の身長のために身を屈めて唇を合わせてくれたものだった。そして私は彼の、力強い背中にしがみつくのが好きだった。けれども、この真っ赤な果実が相手ならそんな手間は省ける。

イヴはこの瞬間ほど、夫と他の誰かのキスを想像して自分のスタイルを呪った時はない。学生時代、友達が一人も居なかったことよ

り惨めだった。

小柄な体型、低い身長、美しいとは言えないダークブラウンの髪。化粧っ気のない幼い顔立ち、色白いだけの素肌は、焼いてみても赤くなってヒリヒリと痛むだけ……。

もともと綺麗でもない妻がお洒落する努力もしなくては触れる気も起きなかっただろう。毎日ワンピースにジーンズ姿の、ファッションへの興味のない妻では……。

ベッドへ入る時間をずらしたのは彼だった。理由は大抵“仕事”で、彼が寝室に戻る時間には私は決まって眠りこけている。私は問い掛けられなかった。

“どうして一緒に眠らないの？” “私たちはセックスレスなの？”——だなんて。

ひとりでベッドに入るのは冬の海に足を踏み入れることと同じだった。毎夜、毎夜彼は一緒に向こう岸へと航ってくれない。私を選んでくれた唯一の男性に、目を背けられるのが耐えられない。私でなくともいいと、夫が気付くのが怖かった。

「——だあれ？」

猫なで声が聞こえた瞬間、イヴは身震いするかのようにビクついた。気まぐれで、何をし出すか解らない存在に怯える、まるで自分はネズミだった。それでも、その生き物が彼の腕に絡み付く姿を見たとき、彼女は思い切り叫んで自分の地位を主張したくなった。

私の夫よ……！！触らないで——！！

しかし次の瞬間、夫の無情な低音の前では、自分の最上級の地位ですら風前の灯火に過ぎず一瞬で消え去るのだと彼女は思い知った。「奥様だ——」

以前夫が、賛美と称賛を込めて自分をその愛称で呼ぶことに、イヴは有頂天になり舞い上がったものだった。機嫌の悪い夫が、悪戯心でそう呼んでみせるのだって彼女には幸せだった。それなのに……。

たった今夫が、その幸福の呼び名を踏みにじり、皮肉った物言いに、イヴは深い衝撃を受けた。夫は、興味のない怯える獲物をただジッと見据えるライオンだった。

「――すまないが、帰ってくれ。どうやら今夜、君とは楽しめそうにない」

最初の文句を聞き取ったイヴは、初め自分へ言われているのだと思った。けれど、彼の深海を思わせる静かなブルーの瞳は、もう一人の女に向けられた。

そして次の光景に、イヴの理性は烈火の炎に燃え上がった。真っ赤な毒リングが彼女の夫を“ダーリン”と呼び、深紅のルージユを彼の唇に押し当てたものだから。クールで頭のいい女の振りをするのはもう難しいと、彼女は予感した。

ライオンは――音を立てず、空気を乱しもしない。ただただ静かに、こちらを振り返った。

〈?〉

3

「——遅いお帰りだね。鍵を無くした？それとも迷子かな」

冗談を口にするのに、夫はちっとも面白そうでなかった。

けれど何の音沙汰も無く、半年間も放っておいたのは彼の意志なのだ。私の逃避行は、秘書や探偵やらのおかげで筒抜けだったはずなのに……。

半年ぶりの夫を慎重に盗み見したイヴは、がっかりした。相変わらず夫は出ていく前日と変わらない魅力を放ち、誰もが羨み、憧れる男性に間違いなかったから。

——私は何を期待していたの……？妻の家出にショックを受け、髭反りも出来ない無精髭をはやした夫？髪を整えることを忘れた夫？食が喉を通らず、素晴らしい体型が衰えた夫——…？

夫は悲しいほどに完璧だった。

「…お忘れのようだけど、ここはまだ私の家でもあるの。我が家でホテルの営業を始めた覚えはないわ」

夫はブラックのデザインスーツを完璧に身に付けていたが、リビングに足を踏み入れながら上着を脱ぎ、ネクタイも反対側のソファアの背にかけられた。彼女の誇りある妻としての仕事の一つは、今やソファアの背に奪われていた。

夫が白いシャツのボタンを緩める短い数秒、ボタンに掛けられた太い指、覗いた鎖骨と首筋にイヴは唾を飲み込んだ。その布がどんなに上質なものであれ、彼女の記憶から彼の男性的で遅しく、美しい体を隠すことは出来やしなかった。

セクシーな首筋、固い胸板、力強い腕……。割れた腹筋、引き締

まる腰……。無駄な脂肪も、余分な筋肉もない素敵な体……。コロンの着けない夫の整髪料と男らしい汗の匂い……。。

その白い布がどれ程高価なものでも、極め細やかで滑らかな彼の素肌には到底勝らない。彼の恥ずかしい体の一部もすべて私のものだった……。この素晴らしい男性が私の夫だった……。。

しかし、夢心地なイメージは現実へと連れ戻される羽目になった。夫の、冷めた固い声音に夢は打ち破られたから。

「――面白い話があるよ。本で読んだわけでも、映画で見た話とも違う。妻に出て行かれた男の話さ、わざわざ夫の留守を狙ってね。どうだい？」

ワインセラーからワインを取り出し、彼は片手をあげてみせた。お酒のことは解らないが、それが夫の好むボルドーワインという種類であることは知っていた。

……ワイングラスは一つだけ。妻がアルコールを好まないと知っていて聞く、夫の些細な攻撃がイヴには堪えた。

傷付いた感情の綻びを見せまいと、彼女は大人しく“結構よ”とだけ答えた。彼はもちろん知っているとばかりに鼻を鳴らし、グラス片手に堂々とテーブルを挟んだ真正面のソファに腰を落着けるのだった。

……私が彼を、恐れているふうに身を正す必要なんてないわ。けれど静止していれば、彼は緊張で動けないのだろう、と嘲笑うだろうか？どちらにしろ、夫ほど堂々となれないことは確かだった。

こちらが顔を青くしている間にも、夫は逃げようのない獲物から視線を外さない。優雅に構える静かな瞳の奥には、勝ち誇った勝利の光さえ潜んでいる。そしてまた、あの嫌な声で演説をし出すのだ。「自分の妻の失踪を秘書から聞く夫の間抜けさといったらない」

「……だからといって結婚生活に第三者を加えていいと理由にはならないわよ」

私の声の、なんて弱々しいことかしら……。夫は怒鳴り声をあげているわけでもないというのに――。

「半年戻らない妻に貞節を守る道義があると？ “奥様”」

「：誓ったでしょう？ 私は18であなたは30歳だった」

「夫婦の誓いの話をしているのかい。 “奥様”」

「っ、：やめて」

私の幸運の呼び名をそんな口調で、そんな愛も尊敬もない声で呼ばないで……！

「妻が見当たらない。代用品で済ませたからといって責められるのか。：ねえ “奥様”」

「やめて：そんな呼び方しないで……」

イヴは頭痛のしだした額に血も通わなくなったように冷たい指を押し付けた。無情にも、痛みは酷くなるばかりだった。

「心配ないよ “奥様”」。彼女はプロだ。健診は受けているし、避妊薬は常備している」

イヴは——全速力で走り、大型トラックに正面衝突するような衝撃を受けた。夫が並べ立てた言葉はそれほど残酷で無惨なものだった。そして次の瞬間にはハンドバッグを掴み、同時に立ち上がった。何の為にやって来て、バックの中にある決心を突き出すなんて考えはもはや頭になかった。とにかく一秒でも早く消えてしまいたい。でなければ、嫉妬に狂った馬鹿な女が顔を出してしまう！ 声を荒げてしまう——！！

けれどイヴの体は見えない糸に繋がれているように不自然に立ち止まった。夫が支配する糸によって。それが思いもしない大声だったからかもしれない。

「座れ——！！」

かつて、これほどまでに怒鳴られたことがあるだろうか？ いいえ、なかった。夫は妻に、シュガーたっぷりと蜂蜜シロップをたくさん入れたフレンチトーストのように甘かった。彼がこんなにも怒号をさらけ出すのも初めてだった。

「いいかい。次、夫婦の間でどちらかが置き去りにされるなら、それは間違っても僕じゃない。座るんだ」

夫に行くな、と腕を捕まれたわけではない。肩を押されてソファに縫い付けられるわけでもない。私には自由があった。夫はただ、そこに座ったまま口を開いただけなのだから。

ただ、彼の声はあらゆる者を従わせる力があつたのだ。私が大人しく、ゆっくりと腰を下ろす姿を見るときの夫の不適な笑みは屈辱感の何物でもなかった。

「――用件を話してみたらどうだい？その握り締めた可愛い拳をひらいて。それではバッグの中にある大事な物が取り出せないだろう？」

そのとき、妻がここへ来た理由を彼は知っているのだと、彼女は悟った。

「…私を苛めて…楽しんでるのね……」

「よく言うだろう？“好きな娘ほど苛めたくなる”ってね」

「ふざけないで……っ！仕事を言い訳にして私の側を離れたのはあなたじゃないの……」

「君は夫婦生活が無かったから拗ねているのかい？」

「っ……………」

彼女は羞恥心という勇氣に手伝われ、ついにバッグの底からソレを取り出してテーブルに突きだした。

市役所から受け取った日には勢いのままつらつらとペンを走らせたが、沸き起こった怯えを隠すように半年間も机の引き出しに眠らせて置いたもの。それから二度目の空気に晒されるソレは、真新しい紙の匂いが感じられた。

「これにサインをしてほしいの。私は……署名済みよ」

イヴは離婚届を突き出してから、夫が取り乱す姿を今か今かと窺っていた。しかし、彼から冷静さが失われることはなく、この状況を楽しんでいるようでもあった。

「僕は自分の検討が外れることを祈っていたが――僕らがセックスをしないからという以外に理由はあるのかな。マイ・ピュア？」

理由を口にするなら、あらゆる言葉が列に並んでいた。

私が欠陥品だからよ……私があなたの夢を叶えてあげられない女だから……。私に赤ん坊が授からないからよ……。あなたに可愛い息子や娘を抱かせてあげることが出来ないから……。――。

だけど、真実を話すつもりはない。優しい人だもの。話したら、彼は私をきつく抱き締めてくれるに決まっている。自分の長年の夢を諦めても、私と二人だけでいいのだと言ってくれるに違いないのだから。

「お小遣いが足りなかったのかな。それとももう少し大きい家に住みたい？」

だから私は、恐る恐るでも口を開かなければならない。例え彼がもう二度と私を、“マイ・ピュア（僕の純愛）”と呼んでくれなくても――。

「ほかに……」

「なんだい？」

「他に好きな男ひとが出来たの――」

イヴの瞼の裏にいつも思い描いた、夫の瞳の色を受け継ぐジュニアたちが顔を出した。彼女を勇気付けるかのように。

そうよ……だからジュニアたちの父親は決してこのような瞳ではないはずだった。こんな恐ろしい瞳ではあってはならない。

美しい水色の中に、煮えたぎる炎の赤色が雷のように走っている。雨雲が嵐を呼ぶように水色は群青に色を変え、やがて黒に侵食された。

「…僕がなぜグラスを持ち、腕をソファーにかけているのか解らないのか……。君に殴りかからない為だ!! 妻を罰しない為だぞ!!」
地を這うような声を耳にしたとき初めて、彼が一度もグラスに口を着けていないことに気が付いた。ワインが揺れていることに気付き、彼女は目を覆いたかった。夫は沸々と煮えたぎる怒りの塊だ。彼が、あと少しの理性と手加減を手放したらグラスを握り潰してしまえるだろう。

イヴは夫の怒りの前に座していることが本気でおどましかった。

「その命知らずな男は僕より資産家か? 決して、ベッドで君を一人眠らせたりしない男かい」

早口でまくし立てるのは機嫌が良くない彼の証拠だ。

「…お金は関係ないわ……。彼は——少なくともあなたのような質問はしない真面目な男性よ……」

嘘は抵抗なくすらすらと舌を滑り出ていった。その言葉のおかげで、偽りの世界の住人が無防備な彼女を守ってくれる。

しかし、夫が突然笑ったせいでイヴはそれ以上口を開けなかった。

「彼」ね――…ふん。真面目だと？同性のことは君より詳しいつもりだが、そんな男が居たとは驚きだ。僕は君を見た途端君の裸を想像し、どんなにぴったり合わさるか思い浮かべるのに」

以前の彼女なら、夫の口車を愛の言葉と信じ、同じ熱情を思い出し逆上せあがったかもしれない。でも今では、それを無邪気に受け止めるほど幼稚ではなかった。

「それは嘘よ……」

だったらなぜ寝室から背を向けたの――？ただ抱き締め、手を握ってさえくれなくなったの――？

理由を解っているから私は余計に苦しんだ。妻に面倒な問題があることを夫はきつと悟っていた。「不妊」という言葉を切り出したのは私の方だった。良い顔をしない夫に妻は食い下がった。

今は無理でも、私はきつとあなたを父親にしてあげられるわ……。そう信じて説得したかったのに。

「――そんなことはしなくていい。治療をしてまで叶える夢などないよ」

「私なら頑張れるわ……治療にも耐えられる……」

“よしてくれ――機械や薬物を飲むような治療で君に子供を産んで欲しいとは思わない”――…。

不妊治療を希望する妻を夫は気に入らなかった。

夫婦生活が三年を過ぎても妊娠のきどしはない。毎月のモノが来る度、私は自分を呪わずにはいれなかった。私はどこか、女性として母親になる機能が劣っているのではないのだろうか……？と不安に押し潰される思いだった。

【不妊】――男女が避妊なしで性交しているが二年以内に妊娠に至らないこと――。

それでも、賛成の返事をくれない夫に内緒で、ストレスと上手に付き合う、体温をあげる、ノンカフェインなど妊娠しやすい体づくりに励んだり、一番妊娠しやすい時期を計算して抱き合う“タイミング法”を試したりもした。だからある夜、私は動揺し傷付いた。

結婚以前のように夫が避妊具を準備して妻を抱くようになったことに。

結婚四年目に、とうとう夫は妻のいる寝室へ足を踏み入れる時間をずらした。はつきりと、お前は役立たずだと言われることの方がよっぽど良かった。それから二度と触れて貰えないなんて……考えもしなかったのだから。

まさか夫が別の女にひと触れていたなんて……聞かされなくなかった――。

「あなたも、独身に戻ったら喜んでくれる女性がいるでしょう？ ……さっきの彼女のように」

「お互い好都合ってわけか？、……しかし、言うようになったものだね。あの可愛らしかった奥様が」

その言葉の通り、イヴは自分が彼に口答えや反旗を翻すなどとは想像もしていなかった。彼女は決して、ハキハキと言葉を放ち、自信にみなぎるキャリアウーマンタイプではなかった。愛する男性に尽くす為に生まれたような、控えめで従順な妻だった。

「話は解ったよ。その男と仲良くする為にサインしろと言うんだね。ペンはあるかい？」

嫌味な言い方なら気にしなかった。いちいち傷付いていたら夫には挑めないと解っている。

イヴは、ガタガタと震えているせいで強気な仮面が剥がれ落ちないことを祈るばかりで、夫が満足気に笑い出したいのを堪えていることにはまるで気付かなかった。何の疑問も疑心も持たず、ペンを差し出す為に素直にテーブルへと手を動かしたのたのである。そのときを静かに、ライオンが狙っていたとは知らずに。

「っ――……」

夫のぎらついた笑みを見た、騙されたと知ったショックで、イヴは呼吸を忘れた。

そして、すぐさま伸びた大きな手が、自分の頼りない手の甲に絡

み付いたとき、恐れていたことが起きる予感がした。夫の力強い指が手に絡んで離すまいとしているだけで、彼女は涙が出るくらいに愛していると叫びたかった。例え、彼の指一つで心を動かされたとして、この手の中から去らねばならないと解ってはいても……。

「――随分と甘く見られたものだ。これ程簡単に引っ掛かってくれるとは。もっと疑ってかかるべきじゃないのか？」

「っ：は、：はなして……」

「五年も一緒に居たんだ。僕がそうしないことは解っているだろう」「解った」と言ってくれたのは嘘なの……？」

「気に喰わない男の為にわざわざサインしてやる理由は僕にはない」「理由ですって……？夫婦二人とも不貞を働いているのよ？結婚を続ける意味なんてないわ。お互い本当に幸せになれる相手を選ぶだけ。それなのにどうして惑うの……」

「本当の幸せ？君のそれは、寝室で相手をしてくれる男に走ることか？」

「っ：そうよ、いけない？私はまだ若いよ、女なのっ……老いた夫じゃ相手にならないから仕方ないわよね」

ああ……なんてことを……。

叶うのなら誰でもいい。彼を傷付ける自分を、イヴは処刑して欲しかった。

「僕が……不能だと言いたいのか。妻一人、満足させられない男だと」

いけないわ、これ以上を言っでは……やめなさい、イヴ……。

「ベッドへ寄り付かない原因はそれなのでしょう？自信がなかったのよね。あなたは12歳もオジサンだもの」

ただ、嫌われない。このまま憎まれた方がマシだと思えた。夫からの別れ話を、彼女はずっと待っていたから。来る日も来る日も、夫がリセットボタンを押す日を一人ぼっちのベッドの上で待っていた。

「……なら、君が自分で確かめればいい――」

イヴが怯えんだ隙にはもう、夫は指を捕らえたまま隔てるテーブルを乗り越え、座ったまま青ざめる妻を見下ろしていた。

ああ……誰でもいい。愛する男性を拒む方法を教えて欲しい。

〈?〉

5

「ほら…君のお気に入り場所だ」

たやすく、当然に自分の特等席だと言わんばかりに妻に乗り上げた夫はセクシーに掠れる低い声で冷ややかな攻撃を囁いた。

目眩がしたように目の前が眩んだ。

“君の”……、ですって……？

かつて二人が夢中になったこのソファは、夫にはスウィートでも何でもなかったのだろうか。彼女は秘かに樂園とさえ名付けていたのに。

夫は妻の背けられた顔から、自らが僅かばかり乱した服の間から覗く白い肌の上に視線を滑らせている。衣服を剥ぎ取られ、胸を荒々しく揉まれたわけではなかった。言葉もなくただ視線を注がれる。たったそれだけのことがイヴには酷い拷問だった。それこそ、微かに震える睫毛、慎重に繰り返す呼吸の音、喉の動き。皮膚の下を流れる血管でさえ夫には見透かされている思いだ。

18歳の初な少女が愛した人は非の打ち所のない完璧で大人な男性だった。そんな彼に見つめ続けられることへの自信は未だに芽生えない。私はコンプレックスの塊だった。

初体験は彼と結ばれることへの幸福感に満ちていて、バージンを捨て去る恐怖は一つになることへの夢中に比べたら何の障害ではなかった。男女がどんなキスをしてどう触れ合うのか。男性の体がどんなに異質で素晴らしいのか。私が彼の裸体の前ではどれだけ小さく、そして同じように尊い存在なのか。裸で絡み合うひとときがどれだけ神聖で美しい行為か。

何もかもを教えてくれたのはすべて彼だった。

夫は初な妻が雑誌で得て驚くような性的知識を実践してみせることはなく、いつも優しく丁寧な愛撫で彼女の夢中を駆り立てた。そして、その胸の下に妻がどんなに美しい女性かをずっと囁き聴かせた。決してスラリとはしない脚も、細くはないウエストも、ここだけは自慢だと思っていた大きめで形の良いバストが、彼の掌には丁度良く収まることの気落ちも、もうどうでも良いと思うほど私は私を愛しく感じられた。彼が触れてくれるのなら欠点までも一緒に羽ばたいてゆけた。

しかし彼は妻を必要としなくなり、すべてを与えてくれたはずの彼は、夫が妻を求めなくなった日の対処法まで教えてはくれなかった。

——例え、沈黙の我慢比べの勝者が夫になろうと構わない。堪えきれずにイヴは、下ろした瞼の向こう側の夫へ向けて遠慮がちで力のない小さな声を絞り出した。

「…やめて……」

「まだ何もしていない」

やっとで絞り出した反抗を、淡々と却下した夫が信じられず彼女はあらかさまに眉をしかめた。

「こんなことしないで。若い男性への挑戦で、今更執着心を見せつけるのはよして」

「…今更？妻に無関心で、僕が平然と半年も独身時代を満喫していたと思うのか」

イヴの気管は震えていたので、それを聞いた後、高慢な女優並みに鼻を鳴らすという大袈裟な真似をせずに済んだ。

「…“彼女”が半年間の独身生活のお気に入りでしょう？私もコール・ボーイを呼ぶ趣味があるの、そう答えた方がいいのかしら——」
たった今、この瞬間の夫を良く知らない人が見れば、妻の反撃にも動じない、無表情で自制心が強い人だと答えるのかもしれない。

だが、私は知っている。この、“眉ひとつ動かさない”事態が問題であることを。

まだ彼の感情が読める分、大声をあげられ、皮肉に唇を歪められる方が良かった。彼の怒りの度合いが計り知れるから。

でもこのときの夫は、氷も溶けることを忘れてしまったかのように不気味な静寂を纏っていた。雷を隠しているだけで暗雲が漂うように。

「…僕の理性を買い被らない方がいい。君の夫も万能じゃない。次そんな趣味があると聞いて妻の首に手をかけないでいてやれる自信などないんでね」

イヴは、目の前の夫の静かなる迫力とそれでも尚、自分を酔わせる魅力に押し潰されまいと、彼の胸板に腕を突っぱねることで自分を守ろうと考えた。けれど、触れることも躊躇われてしまったので彼の下で嫌味を聞き流す辛抱をするしかないのだった。

ああ——この……、すぐ目の前にある彼の胸の中に迷わず飛び込めるならどんなにいいかしら？

いいえ、駄目……。自分がお医者様に告げられたことを忘れたの——？

イヴが、黒いカーテンに覆われた記憶の住民になる前に、夫の存在が彼女を現実へと繋ぎ止めた。臍の横をノックする夫の熱情を意識し、イヴは恥じらいに狼狽えた。

「つ……やめて……」

「…何だい？」

「解っているでしょう……？」

「君の赤面の理由が、“妻を跨いだだけで興奮する夫”——ということならおそらく僕は正解になるのだろうね」

彼は見事に言い当てる。どんな虚勢を取り繕おうとも、彼の熱情で簡単に欲情してしまえる私のことを。

「…あなたが正しいのは解ったわ。だけどそれを証明する為に私を抱く必要はないのよ。あなたの自尊心を傷付けたのなら謝るわ、ご

めんなさい、だからもう離れて……っ」

「フッ：よく喋る唇だね。試してみないのかい。僕が、妻が“老いた夫のセックス不足の不満から若い男へ目移りした”、と聞かされて怖じ気づくような不能者かどうか」

彼が男性として劣っているなんて考えたことはない。初めから彼は素晴らしい男性だった。

もしも次、夫の指がワンピースをなぞったら……？もはや彼を拒める自信などない。柔らかな胸が彼の固い胸板に押し潰され重なり合う姿を想像するだけで、私は熱々のホットケーキの上で溶けるバターのようにとろける始末だ。

愛する男性に組み敷かれる。その愛する男性に服を脱がされ、大きな手が肌を滑っていく。それがどんなに最上級で甘い儀式か、彼女は狂おしいほど解っていた。今再び与えられるかもしれない熱情を手放せる勇気もなかった。だが、イヴのミシン糸のような理性が働いているのは今や“彼女”のおかげだった。

「…“彼女”との夜が台無しになったからといって、持て余した欲望を向けられるのは御免だわ」

「僕が彼女に興奮したとでも言うのかい」

「だって：それしか思い付かないわ。私たちはもう長い間キスだっ
てしていなかった。あなたは私を避けた。：私に魅力がなかったから」

“不良品だから”という言い方で彼に疑問を抱かせてはいけない。
「どうして君は自分が美人だって気が付かないんだ。毎朝鏡を見る
だろう？」

「ええ、でも出逢った頃はどうしてもあなたが冴えない茶ネズミを選
ぶのか不思議だった」

イヴはヘアも瞳も平凡なブラウンな自分を“茶色のネズミ”と罵
った。

「そんな私をあなたは特別だという気分にさせてくれる。だけどそ
れもあなたが興味を失う前までの話よ」

彼女は一息ついてすぐ、自嘲気味に言葉を捲し立てる。

「会話もなくなり、たまに挨拶を交わせば夫はすぐに目を反らした。私が何かを喋り出そうとすればあなたはビジネスケースに手を伸ばし出掛けていくの。妻の顔を見るより休日の会社のデスクがあなたには居心地が良かったのよ」

夫はすぐさま獲物を喰らおうとする勢いで口を開いた。だが何も聞こえなかった。彼は声にしなかったから。何かを言いたげに翳る瞳、僅かに開いては閉じる唇。的を射た妻の攻撃は夫を少なからず失速させた。それでも彼女の心に駆け巡ったのはやはり勝利感などではなかった。

やがて彼は、ぽつりと落ちた雨粒のようにたったそれだけを呟いた。

「……そうじゃない」

例えば、豪雨が降り注いでも一粒の雨音をイヴには聞き分けられる気がした。

「夫が——僕が妻の家出にショックを受け傷付くような男なら君は嬉しいのかい？それならそう言ってくれ。僕はこの半年間の自分の有り様を証言してみせる」

有り様……？まるで私の居ない間、落ちぶれていたような言い方だが——、いいえ、そんなことは無理よ、と彼女は返した。完璧である夫から傷付いた証を見つけられなかったから。すると彼は言った。君は何も解っていないのだと。

「僕が仕事を投げ売るような男なら君を喜ばせられたかい？食が細くなり、皺になったシャツを毎日着続けていたら？——だが実際僕は仕事をこなし、着替えた清潔なシャツにネクタイを締めた。ピザのテイクアウトの方法だって知っている。僕は何も変わらなかった」
堪えきれなくなり、イヴは口を挟んだ。

「そうよ……あなたはナイーブな男性じゃない……」

私の為に、……傷付くような……。

「ああ。……君の作る料理だけを食べられないわけでもない。だが——

」

イヴは驚きに目をみはった。川も流れを止めてしまったかのように。威力も迫力もスピードもない夫の声は、静寂の中をイヴの耳に辿り着いた。

「：無様な格好をしていないからといって僕が傷付いていないなんて理由にはならない」

彼女の心は18歳の純白のウェディングドレスを身に纏った日に舞い戻った。丁度、永遠の愛を彼が私に誓ってくれた瞬間に……。

今、夫が話した言葉はこの上ない愛の一日に彼女を連れ去った。

彼が、まるで妻を本気で追い詰めるつもりなどなかったかのように離れると、イヴは、ゆっくりと素足を水面に浸していくような、じんわりとした喪失を味わった。夫という圧迫感が遠ざかったとき、ライオンが追跡を断念したことで小動物が得るような安心感は微塵も感じないのだった。

自由になった体を起こし、広がった髪に手を撫で付けながら考えるのは、胸に佇むシンプルでインパクトある悲しみのことだけだった。こうして半年間離れていようと、彼は的のど真ん中に銃口を合わせているかのように私に傷を付けることが出来るのだから。私は、ライオンに例え噛み殺されるのであっても、その胸の下に居たいのだ。

「……何不自由なく、暮らせていたあなたの言う傷は随分可愛いものね。絆創膏を貼って直したら良かったんだわ」

夫を皮肉った言葉遊びに、彼は笑みを浮かべてはくれなかった。もうお遊びは終わりだというように。

「僕に向かって、6歳の一人で手当ても出来ない坊やに話し掛けるような真似はやめるんだ」

「…坊やが“彼女”を買うのかしら？それとも坊やには特別なお世話をしてくれる高級ナニーが必要だったの？」

ブルーとブラウンの瞳と瞳がかち合い、海と大地は混じり合わずに冷たい炎がくすぶった。

第三者を加えるな――、と夫にマナーを問い質しておきながら、他に好きな男性が出来た……と言う自分はルールを守っているとは

言えなかった。

「……私の居場所を知らなかっただなんて、言わせないわ」

イヴは、逃げ込んだ生まれ育った小さな家の中に、たった一本のコール音が鳴り響くのを待っていた。それが、家出をした妻への不満と帰りを促す夫の怒鳴り声であっても構わなかった。彼の人生から出ていくという家出の衝動は、夫の声を聞いてしまえば、飛んで帰ろうと思える程度のものだった。

「僕が受話器を持ち上げなかったと思うかい。電話が鳴れば期待して、妻からの別れ話に震え上がらないと本気で思うのか――。：世界中の妻帯者が驚くだろうね。まさか自分の妻が、ふたりが夢中になったこのソファ―に“若い男”を土産話にやって来るとは思わない」

「っ、我慢してるのが自分だけだなんて思わないで。あなたのガールフレンドが振り撒いたフェロモンのせいで吐き気がするのは私も同じなのよ……っ」

イヴは進展のない話し合いから、叫んだ勢いにつけてソファ―を立ち上がった。こちらが細い針先でつつこうと思えば、夫はその倍の威力を持って攻撃的になるのだ。

「もう、――っ……」

もう、こんな言い合いはよししょう――……上手くいけば数秒前に口を滑り出るはずだった。しかしその時、立ち上がったイヴの指先に、冷ややかな攻撃とはかけ離れた夫の熱い手のひらが絡みついて、彼女の不恰好に口を紡んだ。とうとう真剣に怖かった。指に絡まる冗談には片付けられない力の込められた指も、その指に囚われたいと願う自分自身も……。

「あ、あなたは、はっきりと……自分の妻が他の誰かと寝たと聞かされなければ私を追い出せないの？」

「セックスが問題なら僕を拒んだのは君の方だ」

……夫のキスが好きだった。唇を少し開いてゆっくりと肌に近付く唇。それから舌を出し……、啄むように吸う夫の仕草が……。

裸の胸に重ねた右手に、夫の鼓動を感じ取るのが好きだった。抱き込まれながら同じリズムに揺られるのが好きだった。愛する男性を愛する女性なら拒む理由などないはずだ。

「何を言うの、ずっと、あなたを待ってたわ……、」

夫が何を話し出すのか、まるで理解出来なかった。だから、彼の告白は妻を凍り付かせた。

「君の頭の中は出来てもいない子供の存在でいっぱいだったのに？」

「……………」

「……電卓で出したような日にランジェリー姿の妻に誘惑されて、僕が幸せだったとも思うのか？」

あまりにシヨックで、夫の手が絡んでいなければ、イヴは倒れてしまいそうだった。

過呼吸とはこんな感じだろうか……？海で溺れたらこんな風に空気を求める代償に息苦しさを伴うのだろうか……？

「君は、危険日以外に夫に触れられるのを嫌がった。僕らは子孫繁栄に躍起になって交尾する動物か？」

あまりの言い様に言葉は出てこない。

「避妊をしたのは小さな仕返しのためだった。……だが、傷付いてる君を見て僕が喜べる訳がない。あんな最低な気分になるのはもう御免だった」

「……だからなの？だから他の人を私たちの家にまで連れ込んで……」

第三者を引き合いに出し夫への信頼を見定める妻を、彼は熱意を持って説き伏せた。

「……君に出会った瞬間から君以外の誰のものでもなかった。君が隣に存在しなかった半年さえ僕は君だけのものだった。君一人だけの」

このまま本当のことを話したらどんなに良いだろう……？

イヴは考えずにはいられなかった。しかし、それは先のない階段を知っていて踏み外すような無謀さ。見えている恐怖。

彼女は夫の言葉に震える声を重ねた。

「……5年よ。後5年したらあなたは40歳、10年なら45歳になるのよ。このまま何も変わらなかったら……？父親になれず、歳をとっていくだけの人生を強いる為に、私は、ここへ来たんじゃないのよ——」

その瞬間、絡んでいたままだった指が代わりに腕を捉え、座ったままの、ハツとした表情の夫の前にイヴは立たされる形になった。

「……………それが理由なのか——“出来ない子供”が——」

彼女は確信した。隠せない秘密を。彼が妻の嘘を見破るのに時間は要らなかった。

「全部、すべて君のフェイクか！答えるんだ、イヴ！！」

「5年が過ぎても妻に子供が授からないのよ、あなたも考えたのでしょう？なにか問題があるんじゃないか、って。……わたし……、私は知っているのよ、あなたが検査を受けたこと……っ」

見ない振りをした夫宛の白い封筒は、彼が完璧な男性であるとの証明だった。口に出されることなく彼の心の奥にしまわれた証。「原因は私にあると思ったのでしょうか？」

それでも夫は妻を責めることなく、己の夢を理由に苦しいと解っている治療を進めない。彼の優しさだった。

「私は母親になりたいわ。でも私たちじゃ相性が悪いのね。初めて結ばれたカップルだって妊娠するというのに。違うパートナーを選んで別々に進むのは悪いことではないわ」

「僕は父親になることより、いつの日もどんな時もまず君の夫でいたい」

よりいっそう腕を捉える力が、これから離れねばならない現実を思うと耐えがたかった。

イヴは、目一杯に感情のない視線で夫を見下ろした。

「……妻に避妊する意気地のない夫が相手じゃ、叶わないって言うてるのよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3172r/>

貴方のために…

2011年7月25日19時19分発行